

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】 篠直樹

【所属】 (助成決定時) 大阪大学大学院 文学研究科文化表現論専攻英米文学専門分野博士後期課程

【研究題目】 第三世代のユダヤ系アメリカ人作家における空白のテキスト戦略

【研究の目的】 (400字程度)

本研究はホロコースト第三世代のユダヤ系アメリカ人作家の作品をテキストにおける空白の表象という観点から分析するものである。そして、テキストの空白が意味するものは現代のユダヤ系アメリカ人が過去のユダヤ人に対して感じる時間的・空間的・心理的距離である。空白について語る際特に重要となるのは、彼らが20世紀のユダヤ人が共有した最大のトラウマティックな事件であるホロコーストに直接アクセスできない点だ。「事件」に実感をもてない彼らは、自身とホロコースト、あるいは過去のユダヤ人に対する心的距離を、空白を伴ったテキストとして生成し、さらにそこに時空間的な異化効果を強烈に施すのである。こうしたコンテキストにおいて創造された作品を分析し、それぞれの作家に固有の技法的特徴を明らかにすることが本研究の最終目的である。

【研究の内容・方法】 (800字程度)

本研究はホロコースト第三世代のユダヤ系アメリカ作家のテキストを空白表象に着目しながら分析する。そして、テキストにおける空白とは現代のユダヤ系アメリカ人が抱く過去、特にホロコーストと彼らの間に存する距離——時間的・空間的・心理的——の謂いである。結果として、第三世代のテキストには強烈な時空間的異化効果が生じるのだ。以上の仮説的前提に立ちながら、本研究はこの世代を代表する4作家、Jonathan Safran Foer (1977~), Nicole Krauss (1974~), Nathan Englander (1970~), Michael Chabon (1963~) の長編作品を論じる。

Foerについては *Extremely Loud & Incredibly Close* (2005) を世代間交流という視点から解釈した。*Extremely* においては移民第二世代が死亡している。だが、この世代の死が第一世代と第三世代との交流を促す。本研究の文脈において重要な点は第二世代の死がテキストの空白によって表現される事実である。そして、第一世代と第三世代の交流を通してキャラクターはトラウマを克服し新たな主体性を獲得すると論じた。

Krauss のテキストは *The History of Love* (2005) をとり上げた。*History* は4人のメインキャラクターの語りを前景化する。しかし、本研究は幽霊的な準-登場人物ともいえるキャラクターの語りに着目し、分析した。そして、一見統合的な物語構造が幽霊的キャラクターのナラティブによって紐解かれ、*History* の語りは分散性、あるいは拡散性によって特徴づけられると結論づけた。

Englander については *Dinner at the Center of the Earth* (2017) をとりあげた。*Dinner* は現代のユダヤ系アメリカ人にとって困難な政治性——中東におけるイスラエル(ユダヤ人)とパレスチナ(アラブ人)の紛争——をはらむ。こうした文脈において、*Dinner* が厳しく問うのは倫理、特に極限状態において人間は他者に対していかなる方法で責任をとることが可能かという点だ。本研究は特に中東という場の政治的曖昧性がテキストの語りに影響する事実を指摘した上で、*Dinner* の語りが戦争について直接的には言及しないこと、そして作中様々なかたちで表現される闘いにおいて未来に向けた語りが生じ続けることの二点が作家の倫理性を象徴するのだと結論づけた。

本研究は以上のテキストを分析・論文化し、2022年末に博士予備論文としてまとめる。そして、来年度中には Michael Chabon, *The Yiddish Policemen's Union* (2007) 論も加え、博士論文を執筆し完成させる。

【結論・考察】（４００字程度）

テキストを個別的に精読・分析した結果、現代のユダヤ系アメリカ作家が変奏的に表現する空白は彼らが抱く時空間的・心理的距離の謂いである、という本研究の仮説は妥当性があると改めて考えた。そのうえで、今回は過去の事件、つまりユダヤ系アメリカ作家のテキストにおける空白の原因をホロコーストに還元的/一元的に求めすぎたきらいもあるとも感じた。他の迫害（ポグロム、ゲットーへの強制移住等）に関連付けて議論をさらに発展させるためには、今後歴史学的アプローチを洗練させる必要があるだろう。つまり、テキストとコンテキストの関係性をより実証的に研究しなければならない。このような手法上の発見をできた点は貴財団からの助成なくしてはかなわなかつただろうと思う。改めて感謝の意を表したい。